

## なぜ離散なのか 第一部

2009年7月26日 アシェル・イントレーター

今週の水曜日の夜から、毎年行われる伝統的なティシュア・ベ・アヴ(注)、第4月の9日の断食が始まります(エレミヤ 52:6)。この日は、第一と第二神殿の破壊、そして1492年のスペイン追放を含むユダヤの歴史上、いくつかの破壊的な出来事を記念する日です。

注:ティシュア・ベ・アヴ(聖書暦のアヴの月(第四の月)の9日)。現在のグレゴリオ暦の7月~8月に当たる。ユダヤ人にとって最も悲しむべき日として、この日に断食を行い、哀歌が朗読される。タルムード(口伝律法。旧約聖書の膨大な注解書)のミシュナー(ターニト4:6)には、この日、5つの出来事が起こったと記録されている。すなわち1) 民数記13-14章に、イスラエルが12名を選び出しカナンの地を探らせたが、ヨシヤとカレブ以外の者は恐れおののいて約束の地を攻め取る事を拒否した日。結果として40年間荒野をさまようこととなった。2) 紀元前586年、ソロモン王によって建てられた第一神殿がバビロン軍によって破壊された日。結果としてバビロンへ移送され、70年間捕囚生活を強いられた。3) 紀元70年にヘロデ大王によって改築された第二神殿がローマ軍によって破壊された日。その後エルサレムは占領され、大勢のユダヤ人が殺され、1900年に及ぶ大離散が始まった。4) 紀元135年ローマ帝国に対するバル・コクバの反乱の鎮圧。そして、エルサレムは一切ユダヤ人が立ち入ることのできない地(年に1回、アヴの月の9日だけ、エルサレムに入ることが許された)となり、名前も「アエリア・カピトリーナ」に変更されてしまった。5) 紀元71年(神殿崩壊の翌年)のローマ軍によるエルサレム包囲とユダヤ人の反乱と鎮圧。そして、紀元後の主な出来事として1) 1492年のスペインからの追放。2) 1942年のアヴの月の9日前夜、ワルシャワ・ゲットーから強制収容所へユダヤ人の大輸送が始まったとされる。(Wikipedia 英語版より)

離散の意味(最初はバビロン捕囚(紀元前586年)、そして大離散(紀元70年から1948年まで))には、ユダヤおよびクリスチアンの思想に対し大変な聖書的重要性を持ちます。ユダヤ神秘主義における離散の意味はクリスチアン神学におけるイエシュアの死の意味と類似しています。聖書的にはこの二つはつながっています。

イスラエルの歴史はイエシュアの生涯と類似しています。エジプトへ下りて行くこと(マタイ 2:15)、荒野に40日間-40年間いたこと(マタイ 4:1)、過越の祭り十字架刑(マタイ 26-27)などです。ユダヤ人がイスラエルの地から離れることは、死によってメシアの魂が肉体から離れることと類似しています。(ユダヤ人が約束の地に帰還することは、イエシュアの復活と類似しています(エゼキエル 37:12))。

エルサレムの宗教指導者がイエシュアを処刑しようとするのを主がご覧になった時、主は神殿の破壊と大離散が近づいていることを理解しました。マタイ 23:37-39「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしはめんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたまま残される。」メシアの役割は人々を集め国を復

興させることにあります。もし主が拒絶されるのなら、国は破壊され、人々は四散します。ユダヤ人の離散はメシアを拒絶した結果であり、再集結し国が再興したことは、主を受け入れるという目的ゆえです。

イエシュアは預言者として来られ、エレミヤが来て第一神殿の破壊と一度目の離散を預言したように、主は第二神殿の破壊と二度目の離散を預言しました。ルカ 21:20, 24「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。(中略)異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」イエシュアは破壊と、最終的にイスラエルは回復することを述べられました。以上の理由で、イエシュアはエレミヤと似ているのです(マタイ 16:14)。イエシュアはヘブライ人預言者として、エレミヤがそうしたように、主の世代の人々に対して神の裁きとご計画について述べられたのです。

離散の意味はイエシュアのメシアとしての立場を理解するのに非常に重要なので、主の誕生に至るまでの3つの主な出来事の一つに離散が言及されているのです。マタイ 1:17「それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまで十四代になる。」アブラハムは契約をもたらし、ダビデは王国をもたらし、そしてメシアは離散からイスラエルを贖うのです。

イエシュアの弟子たちは主に尋ねました。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」(使徒 1:6)イエシュアがイスラエルにおいて王国を再興するであろうことは、初期の弟子たちにとって当然のことでしたが、現代のほとんどのクリスチャンにとってなじみがありません。メシアは個人の救いと世界の贖い両方をもたらします。十字架と復活は個人の救いの基本軸です。離散と再集結は世界の贖いの基本軸です。

イエシュアとイスラエルとのつながりを理解しないことは、キリスト教とユダヤ教共に基礎部分の裂け目です。ほとんどのクリスチャンは離散と回復の重要性を見ないので、国家的な贖いについて理解することができません。ほとんどのユダヤ人はイエシュアを信じないので、贖いについての理解が部分的であり、言うまでもありませんが、個人の救いに関しては盲目状態にあります。

エレミヤの時代、ユダヤ人の罪によって70年間離散しました。ほぼ2000年に及ぶ離散の罪の大きさとは何なのでしょう。エレミヤと彼の言葉を拒絶したことにより、最初の離散へと追いやられたように、イエシュアと主の御言葉を拒絶したことにより、二回目の離散へと追いやられました。

#### ルカ 19:41-44

エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

**(中略)一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」**

エルサレムの破壊の原因はイエシュアを拒絶したこととして見ないのは、一部は反キリストの霊によるものです。この御言葉を読んでイエシュアが泣かれたように泣かないのならば、一部は反ユダヤの霊によるものです。

イエシュアは、この事柄についてはユダヤ人の目から「隠されている」と言われました。この事柄については目に見えるもの以上のものがあるのです。イスラエルと教会の關係に付随する深淵な奥義があるのです。**ローマ 11:25「イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり」**イスラエルが破壊され、離散したのは神のご計画の完成が異邦人の国々に及ぶためでした。

イスラエルの離散と苦難は神によって予め定められており、それは異邦人を祝福するためです。**エペソ 3:3,6(前略)この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」**この奥義を理解するには超自然的な啓示がなければなりません。

ティシュア・ベ・アヴの間の週ごとに読まれるトーラーの朗読箇所、**申命記 4:27「主はあなたがたを国々の民の中に散らされる。しかし、ごくわずかな者たちが、主の追いやる国々の中に残される。」**が含まれます。イスラエルの離散は、それが起こる数千年も前から預言されていました。それは歴史上の偶然の出来事ではなく、イスラエルと諸国に対する神の予め定めておられたご計画の重要な部分なのです。

第二部では、ラビ的、預言的、そして終わりの時のイスラエルの離散と苦難の重要性について見て行きます。